

谷口房男著

華南民族史研究

綠蔭書房

華南民族研究

華南民族史研究

編者 黃國光

■著者略歴

谷口 房男（たにぐち ふさお）

1939年 鳥取県に生まれる
1962年 東洋大学文学部卒業
1968年 東洋大学短期大学非常勤講師
1978年 立教大学 一般教育部非常勤講師
1984年 東洋大学文学部専任講師
1995年 東洋大学文学部教授

■主要論著

『華陽国志人名索引 附華陽国志民族関係語彙索引』（国書刊行会、1981年）
『明代西南民族史料 明史録抄』第一冊、第二冊（東洋大学アジア・アフリカ文化研究所、1983・1994年）
「唐・宋時代の「平蛮頌」について―嶺南少数民族漢化過程の「断面」―」（『白山史学』第18号、1975年）
「思恩田州叛乱始末記―明代広西右江流域における土官・土目の叛乱と改土為流―」（『史苑』第42巻1・2合併号、1984年）
「『殿要纂』について」（『白鳥芳郎教授古稀記念論叢 アジアの諸民族の歴史と文化』六興出版、1990年）
「王守仁と少数民族―とくに十家牌法をめぐって―」（『東洋研究』第99号、1991年）

華南民族史研究

1996年1月31日

著 者 谷 口 房 男

発行者 南 里 知 樹

発行所 株式会社 緑 蔭 書 房

〒173 東京都板橋区板橋1-13-1

電話03(3579)5444 振替00140-8-56567

印刷・製本／長野印刷商工株式会社

Printed in Japan

©Taniguchi Fusao 1996

落丁・乱丁はお取り替えます。

本書は私学研修福祉会の刊行助成をうけました

はしがき

本書にいう「華南」とは、一般に中国を華北・華中・華南に三分して言うところの、華南の意ではなく、いま少し拡大したいわゆる、揚子江流域とそれ以南の地域を指している。華南の地、とりわけ今日の湖北・湖南・四川・雲南・貴州・広東・広西の地には、漢民族以外にも多くの諸民族が居住している。これらの地域には、古くは『史記』および『漢書』にみえる「西南夷」をはじめとして、また『後漢書』にみえる「南蛮」と「西南夷」であり、『三国志』中に見える「山越」と「武陵蛮」などが、その主なものである。その後の史乗にも多くの非漢民族（異民族・少数民族）が表れており、その一部は、さまざまな活動を展開しつつ、漢民族との対立・抗争を繰り返しながら、今日の少数民族へと至っているのである。

本書の構成は、第一編を古代華南民族史研究とし、主として後漢時代から北宋時代までの揚子江流域、とりわけ洞庭湖周辺に居住する非漢民族としての「武陵蛮」などをとりあげた論文を収めた。その多くは、一九六〇年代後半から七〇年代半ばまでにまとめたものである。第二編を明代広西民族史研究とし、とくに明代における広西地方の主な民族としての壮（僮・チュアン）族と、その土司制度について言及した論文などを収めることとし

た。その殆どは、一九七〇年代後半以降に草したものである。なお第一編第五章の唐・宋時代の「平蛮頌」と附二の書評『桂海虞衡志輯佚校注』は、ともに唐・宋時代の嶺南地域、とりわけ広西地方の民族史に関する論文と書評であり、これを地域の面からみれば、あるいは第二編に収録すべきものと思われるが、時代の面からみて、とりあえず第一編においた。

ところで、漢民族による華南への進出・拡大は、当該地域に居住していた非漢民族との対立・抗争をひき起こすこととなったのである。従来、我が国のみならず中国においても、このような漢民族の華南への進出・拡大を、また漢民族と非漢民族との対立・抗争を、漢民族による華南の開発・発展とみなす視点から、さらに非漢民族の漢民族への融合・同化（＝漢化）といった視点から、多く取り上げられてきた。筆者も基本的には、このような視点に立って考察を進めてきたのである。しかし、このような視点のみを強調することが、果して華南民族史の把握にとって、どれほど有効であり、かつ適切であるかどうか、必ずしも疑問なしとしない。むしろ漢民族の華南への進出・拡大は、当該地域の非漢民族社会を破壊するものではなからうかとも考えられるのである。とりわけ、民族のアイデンティティが強調される今日において、このようなことを改めて問い直していく必要があるのではなからうか、といったことを強く感じるようになってきているのであり、そのことをあらかじめ申しのべておきたい。

目次

はしがき	1
------	---

序章 華南民族史研究の意義	3
---------------	---

第一編 古代華南民族史研究

第一章 後漢時代の武陵蛮	11
第二章 三国時代の武陵蛮	33
第三章 宋・齐時代の蛮	57
第四章 蛮族の諸伝説をめぐって	81
第五章 唐・宋時代の「平蛮頌」	113
附一 諸葛孔明の異民族対策	143
附二 書評『桂海虞衡志輯佚校注』	155

第二編 明代広西民族史研究

第一章	思恩田州叛乱始末記	163
第二章	嘉靖海寇叛乱掃討と瓦氏夫人	191
第三章	王守仁と少数民族	211
第四章	明代広西の土巡検司	231
第五章	広西土司制度の一齣	249
第六章	『殿粵要纂』解題	281
第七章	万暦版『広西通志』解題	299
附一	日本における壮族史研究の動向	321
附二	『殿粵要纂』跋	337

あとがき	339
------	-----

索引	1
----	---

華南民族史研究

序章 華南民族史研究の意義

一、“物博地大”な国・中国

中国は広大な国土と膨大な人口を擁する、まさに“物博地大”な国である。その“物博地大”な国としての中国は、漢民族と五五の少数民族とによって構成された、多民族国家である。一九九〇年の人口調査によれば、約九二パーセント（一〇億四千万人）が漢民族であり、少数民族は残りのわずか八パーセント（九千万人）に過ぎないのである。なおこの他にも、未だ国家が公認していない民族集団として、おおよそ七五万人がいる。このことは、中国における五五の少数民族が、あくまでも国家によって公認された民族であって、中国に実在する少数民族の数ではない、ということを示している。漢民族が圧倒的な多数を占め、五五からなる少数民族は、数の上ではほんの一握りにすぎない。とはいえ、そのなかには壮（チュアン）族のように、一五〇〇万人以上といった少数民族もいるのである。

二、漢民族と少数民族の形成

中国における漢民族と少数民族は、非常に長い歴史的な過程を通じて、徐々に形成されたのである。とくに黄河中流域を中心に分布していた、漢字を用いる集団（これを「華夏族」と呼ぶ）が、周辺の諸集団（文献上では、これを「蛮夷戎狄」とする）と接触し、次第に混血・融合した。このようにして、今から二千数百年以前の秦・漢時代には、すでに華夏族と蛮夷とが混血・融合し、「漢民族」の原型が成立したのである。その後、中国の北方や西方に分布していた民族集団は、武力によって中国へ侵入し、異民族王朝を興亡させた。その過程のなかで、彼らの多くは中原の漢民族と混血・融合して漢民族化し、その一部のは故地へ引き還したのである。一方、中国の南方および西南方面にいた諸民族集団は、漢民族の南下・進出に伴って、漢民族と混血・融合した集団と、漢民族との混血・融合を潔しとしない集団とに分化したのである。とくに漢民族との混血・融合を潔しとしなかった集団は、辺境の大山・窮谷へと移動し、独自の文化を保ちつつ、白らの生活を営んでいた。こうした南北の民族集団で、漢民族に融合・同化しなかった人々が、いわゆる中国国内における少数民族となった。このような経過を辿って、漢民族は周辺の諸民族集団を包括しつつ拡大・発展し、やがて大民族となった。一方、漢民族と融合・同化しなかった諸民族集団は、その規模を縮小しつつ、断続的に中国の辺境へと分散していき、独自の文化を保持していった。ここに中国における強大民族としての漢民族と、弱小民族としての五五の少数民族とが、長い歴史過程のなかで、徐々に形成されたのである。

三、多民族国家・中国と民族史研究

多民族国家としての中国においては、漢民族のみならず多くの異民族が、歴史上に大きな役割を果たした。ところが、これまであまりにも漢民族の役割が重視されたために、少数民族の中国史上における役割は、殆ど顧みられることがなかったのである。

その原因の一端は、中国における文献史料、とりわけ文字記録の殆どが、マジョリティとしての漢民族によるものであり、少数民族自身の手になる史料がきわめて少ない、というよりも、皆無に近い状況であることを指摘できる。また、中国における伝統的な民族史研究は、主として漢民族によってなされてきたことも指摘できる。

しかし、解放以後、徐々に少数民族の人たちによって、民族史研究が行われるようになった。とりわけ、各地に設けられた民族学院（民族研究のための大学）によって、多くの少数民族出身の研究者が養成され、自民族の民族史研究が蓄積されてきている。それに伴って、漢民族を中心とした中国史・民族史研究に対して、辺境の少数民族の役割を見直していくことの必要性が、とくに強調されるようになってきているのである。

戦前のわが国における中国辺境史研究、あるいは中国周辺史研究の取組は、日本の大陸膨張政策と密接に結びつき、主として地域史研究としての支那史・満鮮史研究がまず開始され、やがて蒙疆史研究・西域史研究へと進展していったが、華南史研究とはいえば皆無に等しかった。戦後のわが国における中国辺境史研究は、戦前の地域史研究から民族史研究へと変化していくなかで、中国の北方史を中心とした研究に加えて、次第に中国の南方史の研究も行われるようになってきたのである。

四、華南民族史研究

華南民族史研究とは、中国の華南に居住する少数民族の歴史研究である。とりわけ、湖北・湖南・四川・貴州・雲南・広西・広東などの揚子江以南、中国南部地域の少数民族史研究である。これらの地域には、古代から今日まで、多くの非漢民族、すなわち少数民族が居住している。

わが国における華南史研究の両碩学・河原正博、白鳥芳郎氏は、一九五〇年代から七〇年代にかけて、この分野で多くの論考を発表された。とくに河原正博氏は、『漢民族華南発展史研究』（吉川弘文館、一九八四年七月）に研究成果をまとめられた。また白鳥芳郎氏は、『華南文化史研究』（六興出版、一九八五年九月）という大冊にまとめられている。まさに両氏は、わが国における華南史研究の開拓者である。両碩学の努力によって、この分野の研究が、次第に注目されるようになってきた。とはいえ、わが国におけるこの分野の研究は、他の中国史・民族史研究の分野と比較して、殆ど顧みられることのなかった領域であり、研究者もきわめて少ない分野でもある。

五、広西土司制度研究

この数年来の研究関心は、中国における歴代の民族政策、とりわけ、明代の土司制度である。その理由は、中国のみならず日本においても、従来の土司制度研究が、制度の概括的な究明を中心として、その実態の解明が欠

落していた。とくに実施における地域的・時間的・民族的な差異などについては、殆ど顧みられることがなかった。またわが国においては、広西の壮（チュアン）族史研究のみならず、広西土司制度研究が皆無であった。こうした研究動向にあつて、特定地域・特定民族における土司制度の実態を、究明していくことの必要性を痛感し、まず広西から着手していくこととした。

とくに最近の問題関心は、広西地域の少数民族、とりわけ広西に最も多く居住しているチュアン族の歴史を究明すること、明清時代の広西における土司制度の基本的な史料を収集・整理することであり、しばしば広西壮族自治区に足を運び、広西民族学院を訪問するとともに、少数民族の村を訪ねることが多いのである。

広西土司制度研究という私の研究課題は、きわめて特定地域の特殊な問題であるが故に、単なる広西という一地域の地方史としてではなく、またチュアン族という一民族の民族史としてでもない、中国史のなかに位置付けられなくてはならない、華南民族史研究の一環として取り組んでいくように努めている。

第一編

古代華南民族史研究

